

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：視覚障害者とのことばによる鑑賞ツアー

事業者名：財団法人 水戸市芸術振興財団
(水戸芸術館 現代美術センター)

住所：茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL：029-227-8111 (代)

FAX：029-227-8110

HPアドレス：<http://www.arttowermito.or.jp/>



連携事業者名：茨城県立盲学校

会場：水戸芸術館現代美術ギャラリー

事業期間：平成21年10月20日～平成22年3月15日

1. 館の使命と本事業の関係

水戸芸術館現代美術センターは開館当初から幅広い視野に立った今日の現代美術の紹介に焦点を絞り運営してきた。また、同時に公共文化施設として社会の多様な層にむけた教育プログラムを実施し、市民が現代美術の鑑賞・創造を通じて、多様な価値観に出会う機会を創出することを目指している。視覚障害者対応については1997年より不定期に行ってきたが、事業の定期化、一般化のために本事業を実施し、今後のネットワークの強化とツアーを継続するための基盤づくりを試みた。本事業は、視覚芸術を中心に扱う美術館から最も遠いとされる視覚障害者に向けたプログラムであるが、すべての参加者が「見ること」とは何か？という大きな問いに直面する点では、むしろ広く、見える者にもむけた鑑賞ツアーである。参加者にさまざまな価値観の揺るぎと新たな出会いを提供し、他者への想像力を喚起する館の使命に沿った事業であるととらえている。

2. 企画内容

①事業目的

「見ること」とは何かという作品鑑賞の根本について、参加者が深く考える機会を持つことができる「視覚障害者とのことばによる鑑賞ツアー」を、定期的なプログラムとして定着させるための基盤を作る。継続のために館内外の理解を深め、地域のネットワークをつくる。

②事業概要

- ・地域の関連機関のネットワークをつくるための運営会議を開催する（1回）
- ・鑑賞ツアーのボランティアの研修の実施（1回）
- ・視覚障害者とのことばによる鑑賞ツアーの開催（1回）
- ・記録集の作成と配布

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

事業は「視覚に障害がある人との鑑賞ツアー『session!』」の名称で実施。

・関係者会議（「session!」プレ座談会）

日 時：平成21年12月15日〔火〕17：00－20：00

会 場：水戸芸術館エントランスホール応接室

出席者：太田好泰（エイブル・アート・ジャパン事務局長）

白鳥建二（マッサージ師）

片見美智代（茨城県立盲学校 高等部美術教諭）

久富雅之（茨城県立盲学校 高等部理療科教諭）

伊藤哲司（茨城大学人文学部教授）

中野 詩（水戸芸術館現代美術センター教育プログラムコーディネーター）

司 会：森山純子（水戸芸術館現代美術センター教育プログラムコーディネーター）

・ボランティア研修会

日 時：平成22年1月10日〔日〕10：00－12：30

会 場：水戸芸術館現代美術ギャラリー及びワークショップ室

研修1.「言葉で何が見えるのか?～MARの挑戦」／太田好泰

研修2.「美術館を自由に利用するということ―盲人という立場で」／白鳥建二

研修3.「視覚障害の世界にふれる」

・視覚障害について／片見美智代、

・視覚障害者の日常／久富雅之

・盲導犬ユーザーの日常／宇野沢凌子

・鑑賞ツアー「session!」

日 時：平成22年1月11日〔月・祝〕13：30－15：45

会 場：水戸芸術館現代美術ギャラリー及びワークショップ室

鑑賞した展覧会：「Beuys in Japan:ボイスがいた8日間」

(2) 参加者（研修、鑑賞ツアー）

・参加人数 59名

視覚障害者 7名（全盲4名・弱視4名）

一般 20名

CAC ギャラリートーカー 10名

ATM フェイス（館内係員）12名



鑑賞ツアーの様子

(3) 事業により作成した印刷物等

- ・参加者募集チラシ A4 2色 4000枚
- ・活動記録集 B5 2色刷り48頁、表紙カラー 700部

(4) 実施事業に関する新聞記事等

常陽新聞 平成22年1月12日



4. 事業の成果及び今後の課題

今まで水戸芸術館と、点として繋がっていた視覚障害者、全国的な活動推進をしている団体、地域の盲学校の関係者などが一同に介し、関係者会議では情報とネットワークの共有をはかった。また、水戸芸術館での研修と鑑賞ツアーについて出席者に意見を求め、検討した内容を実際のプログラムに反映した。

ボランティア研修には当センターの市民ボランティア（CACギャラリートーカー）、館内で接客業務を担当する係員（ATMフェイス）のメンバーも参加し、それぞれが担当する分野に有効な研修として実施。また、新たに今後の鑑賞ツアーになんらかの形で関わる層を開拓するべく、一般にも研修への参加者を募った。それぞれ関心が高く当初予定の倍以上の参加者があった。

鑑賞ツアーでは参加者が7つのグループに分かれ、それぞれ3つの作品を鑑賞した。背景にある確固たる思想が反映されているヨーゼフ・ボイスの作品を鑑賞するにあたり、「見たままを伝える」「その感想をのべよう」ことで、参加者の満足する鑑賞ができるかどうか心配もあった。しかし例えば背丈ほどある作品であることを伝える作品描写が、作家のコンセプトに近づくヒントとして機能するなど、より作品に近づくために作用し、ボランティアや係員達が持っている情報を織り交ぜながら、各チーム話が弾み、充実した鑑賞ができた。視覚障害がある方とともに鑑賞することで、より深く作品に近づくこと、そして、見える見えないにかかわらず、他者とともに作品を見る楽しさを提示できたのではないかと考える。

○参加者アンケートより抜粋

女性／35 歳／全盲（水戸市）

ふだん美術に関われること、鑑賞することが少ないので、いい機会だと思い参加しました。例えば同行者一人で見に行ったりするとその人からの情報のみで想像することが多くなるんですけども、こうして複数の方と話し合いながら鑑賞していると、ひとつの作品が最初に見ていた印象とどんどん変化して行って、いろんな見方ができるような気がして、とても良かったと思います。

女性／22 歳／大学生（ひたちなか市）

視覚障害をもった方が美術を鑑賞するというのが、想像できず、意外だったが、実際にお話させていただき、健常者と会話しながら展示を見るのとかわらないんだなと思った。

女性／49 歳／会社員（栃木県）

研修で「言葉で絵を見る」とは、お互いに心を通わせ、心の目で観ることなのか、と思いました。本当に大切なものは目には見えないような、今まで見えていた分、本質を見逃していたような気がする。観るという意味が、少し変わったのかも。楽しく、いろんな事を考えさせていただきました。



「Beuys in Japan : ボイスがいた8日間」を鑑賞



鑑賞ツアー後のグループ発表風景

○今後の課題

- ・本事業では盲学校の先生方に視覚障害のある方への情報提供や勧誘をお願いした。協力していただくことで企画が成立するのではなく、将来的には広報ルートを確立し、視覚障害者のグループなどに独自に情報を送りたい。継続のためには自ら楽しんで参加して下さる層を発掘することが必要になる。
- ・平成22年度は6月と11月に同様の鑑賞ツアーを予定している。本事業に参加した新規のボランティア希望の方たちとの協働のかたちは何か。生かせる方向を探りたい。